

児童発達支援における就学支援において重視している内容

斎藤遼太郎

（茨城キリスト教大学文学部）

KEY WORDS: 発達障害 就学支援 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

【問題と目的】

2012 年の児童福祉法の改正により、これまでの児童デイサービスや知的障害児通園施設等が障害児通所支援として一元化されて以降、児童発達支援の需要が年々高まりつつある。そのため、児童発達支援から小学校等に就学をするという子どもも少なくない。そのような中、就学期における継続的な支援体制を構築するための連携の重要性が問われており、2018 年には文部科学省と厚生労働省の連名により、学校と障害児通所支援事業との連携を今後より強化していくことが提言された。しかし、このように学校と障害児通所支援事業との連携について、省庁からは提言がなされている一方で、何をどのように連携を図るべきか十分に明らかにされていない。

本研究では、児童発達支援が就学支援としてどのような点を重視して取り組んでいるかを検討することを目的とする。その際幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に着目し検討を行う。

【方法】

- 1) 対象者：調査の承諾を得た発達障害児を中心として療育を行っている児童発達支援の職員 176 名を対象に質問紙による調査を行った。そのうち、138 名から回答が得られ（回収率 78.4%）、回答に不備のない 123 名（有効回答率 69.9%）を調査の対象としました。
- 2) 調査時期・方法：2020 年 11 月に実施した。質問紙を施設の各教室に郵送し期日までに返送するように依頼した。
- 3) 調査項目：(1) フェイスシート（年齢、性別、職名、職員歴、所有資格）、(2) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を知っているか、(3) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の 10 項目のうち重視している項目、(4) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の 10 項目のうち最も重視している項目

【結果】

図 1 は、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の認知の有無を尋ねた結果である。72 名が知っていると回答した。また、年齢が高いほど、職員歴が長いほど、保育士の資格を有している者ほど知っていることが分かった。

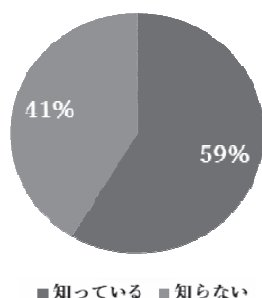


図 1 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の認知の有無

図 2 は、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として挙

げられている 10 項目について、どの項目を重視しているか（複数回答可）を尋ねた結果である。結果、「言葉による伝え合い」が一番多く、続いて「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」という回答が得られた。

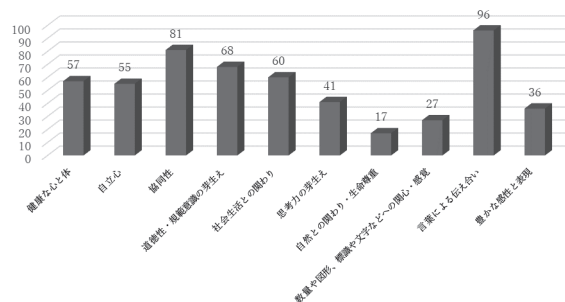


図 2 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として重視している項目

図 3 は、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 10 項目のうち最も重視している項目を尋ねた結果である。結果、「健康な心と体」が一番多く、続いて「言葉による伝え合い」、「自立心」という回答が得られた。

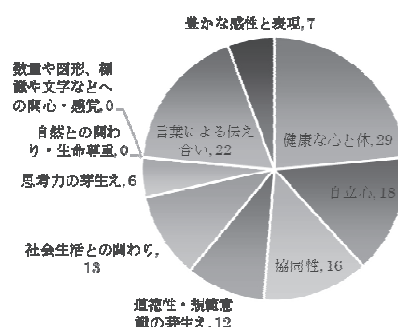


図 3 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として最も重視している項目

【考察】

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、いまだ十分に情報が行き届いていない可能性が示唆された。障害児通所支援事業に対する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の情報提供を強化することが求められる。

発達障害児が中心である児童発達支援においては、10 の姿のうち「言葉による伝え合い」や「健康な心と体」が強く求められていた。発達障害児に見られる言葉の遅れや言葉の使い方、情緒的課題についての情報共有を中心的に扱えるツールを開発することでより効果的な就学支援が行える可能性が示唆される。

【文献】

家庭と教育と福祉の連携「トライアングル」プロジェクトチーム(2018)：家庭と教育と福祉の連携「トライアングル」プロジェクト。
(SAITO Ryotaro)